

ドストエフスキイ研究会便り(3)

はじめに

今回から三回に分けて、ドストエフスキイ文学がどのような現代的意味を持つのかについて、『カラマーゾフの兄弟』の次兄イワンを例として取り上げ、福音書との関係で考えてみたいと思います。まずは最初に、これら三回の構成を簡単に記しておきます。(それらの具体的な構成については、目次も御覧下さい)

まずこの第一回目・「研究会便り(3)」では、『カラマーゾフの兄弟』の冒頭エピグラフに挙げられた「一粒の麥」の死の譬えに焦点を絞り、この譬えがヨハネ福音書の中でどのような位置と意味を持つのか、様々な角度から検討したいと思います。ここから明らかとなるのはイエスとユダやペテロたち、つまり神に命を賭ける師と弟子たちとの十字架を挟んだ対決であり、ここで我々は師を裏切り死に追いやってしまう弟子たちのドラマと直面させられるでしょう。今回は、この問題を扱う福音書記者ヨハネの複雑でユニークな視点へのアプローチを試みつつ、ユダ的人間論の問題を浮かび上がらせることが課題です。

次回の第二回目・「研究会便り(4)」では、師イエスを裏切り、十字架に渡してしまった弟子たちの罪意識の問題が新約聖書の中でどう扱われているかを、諸福音書と使徒行伝の中で、更にはパウロの書簡等の中で確認したいと思います。

基本的に新約聖書とはまずは十字架に至るイエスの言説と、その死からの復活顕現について扱った書物と言えるでしょうが、その編集者あるいは筆者たちは、復活のイエスとの遭遇体験を新たな決定的出発点とし、神の人間救済の経緯についての認識を推し進めてゆく中で、イエスその人についても「神の子」・救世主として捉え、キリスト論的な解釈を強めてゆく傾向があります。この原始キリスト教成立の過程で、大きく背景に後退させられてしまったのは、師イエスを裏切った弟子たちが追い込まれたであろう痛切な罪意識とその清算のドラマではないでしょうか。第二回目は、人間の内なる闇と光の分裂の問題、ユダ的人間論の帰趨について、新約聖書の中にその痕跡を辿る作業です。

最後の第三回目・「研究会便り(5)」においては、このユダ的人間論の角度から光を当てると、ドストエフスキイ文学の内には何が見えてくるのか、それは現代に生きる我々とどう関係するのかについて考え、その典型例として『カラマーゾフの兄弟』の次兄イワンに的を絞り、「神と不死」の熱烈な探究者であるこの「ロシヤの小僧っ子」が辿る闇と光のドラマを取り上げる予定です。

そこに見えてくるものとは「肯定と否定」、「聖と俗」の恐ろしい分裂に苦しむこの青年もまた、十九世紀ロシアに生きる一人のユダに他ならないという事実です。そしてイワンの辿った運命はそのまま、「時代と不信の子」我々現代人が辿りつつある運命と重ねられるのではないのでしょうか。

「一粒の麥」の死の譬え(1/3)

— 『カラマーズフの兄弟』におけるユダ的人間論とイワン—

芦川 進一

目次

《今回》

第一回目、研究会便り(3) 1

問題提起 4

1. 「一粒の麥」、ヨハネ福音書の文脈の中で 4

ヨハネのメッセージ

愛、十字架、永遠の生命

2. 時間と関係の多層性 7-11

過去・現在・未来、「時間の多層性」

神・イエス・弟子・読者、「関係の多層性」

第四の層、師と弟子たちとの断裂

ドストエフスキイが見据えたもの

《以下、次回以降》

第二回目、研究会便り(4)

3. 福音書の「弟子たち」

マルコの弟子たち

マルコの「空白」

マタイと使徒行伝のユダ

弟子たちのその後、師との再会の闇と光

4. 使徒行伝や書簡の「弟子たち」

「ケーリュグマ」が記す「我らの罪」

闇と光、極性の弁証法

「使徒行伝」、ペテロの罪意識

「ヘブル人への手紙」の罪意識

5. パウロの十字架

パウロの「罪」

フィリピン人への手紙から

ガラテア人への手紙から

ローマ人への手紙から

十字架に「つけられる」のか「つける」のか？

第三回目、研究会便り(5)

6. 新約からカラマーゾフの世界へ

聖俗二つの死

イワン（一）、「ロシヤの小僧っ子」が宿す「否定」の悪魔

イワン（二）、「キリストの愛」の否定

イワン（三）、「悪業への懲罰」

復活の曙光

ドストエフスキイのリアリズム

《参考文献》

《付記》

《本論成立の経緯》

問題提起

ドストエフスキイ（1821-1881）の遺作『カラマーゾフの兄弟』（1880）の冒頭には、ヨハネ福音書第十二章 24 節に記されたイエスの「一粒の麥」の死の譬えが置かれている。この譬えから浮かび上がるのは、イエスに主な光を当てれば、イエスを神から遣わされた救世主とするキリスト論、弟子たちに焦点を絞れば、師イエスを裏切るユダ的人間論であり、これらは共にキリスト教成立の根幹をなす表裏一体の問題と言えるであろう。だがヨハネは栄光のキリスト論に大きく傾き、我々の目からするとユダ的人間論、師を裏切り十字架の上に磔殺させてしまった弟子たちが、その後罪意識を抱えて辿ったであろう痛ましい道程については大きく背景に後退させてしまったように思われる。新約聖書の背後に隠された「弟子たち」の内面に深い測鉛を降ろし、「聖なるもの」を前に人間精神が演じる闇と光、極性のドラマを誤魔化しなく追ったのがドストエフスキイではなかったか。本論はこの角度から、「キリスト教文学」としてのドストエフスキイ文学が現代において持つ意味を考えてみたい。その作業はまずヨハネ福音書の「一粒の麥」の死の譬えの検討から入り、次に広く新約聖書におけるユダ的人間論と罪意識の検討に進み、最後に神殺しと父親殺しと兄弟殺しという重荷を背負う「ロシヤの小僧っ子」イワンの罪意識の問題、この青年ユダが辿る「肯定と否定」の道程を追うという手順で進めたい。

1. 「一粒の麥」、ヨハネ福音書の文脈の中で

ドストエフスキイが「一粒の麥」の死の譬えを『カラマーゾフの兄弟』の冒頭に置いた意図とは何であったのか。この問題にアプローチするためには、この譬えがそもそもヨハネ福音書の中で如何なる位置にあるかを確認しておく必要があるだろう。まずは小さな文脈で、つまりヨハネ第十二章 24 節とそれに続く 25 節とをセットで見よう。

「人の子の榮光を受くべき時きたれり。誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし」(十二 24-25)

これら二節が示すのはまずはイエスが、そして弟子たちが「永遠の生命」を与えられるための条件であり、そのためには「この世にてその生命を憎む」こと、つまり「一粒の麥」として「地に落ちて」死ぬことが不可欠だとされるのである。「榮光」、「永遠の生命」。これらの言葉と表裏一体としてあるのは、この上なく厳しい死への覚悟と勧告である。

次にこの譬えを更に広く、ヨハネ福音書全体の構成の中で見てみよう。

これはいよいよエルサレムに最後の入城をした直後、イエスがギリシヤ人たちや弟子たちに向かって発した言葉であり、イエスのいわゆる「公的活動」の終りをなし、かつエルサレムにおいて始まる「受難物語」の出発点ともなり、ヨハネ福音書の文字通り中間部に位置する

ものである。ゴルゴタの丘を向こうに置き、イエスがこの譬えによって自らの活動を総括し、身近に迫る十字架上の死を予告すると共に、弟子たちに対しても死に対する覚悟を正面から迫るのだ。これを記すヨハネによれば、イエスにとっても弟子たちにとっても、地上の生とは「一粒の麥」としての死、つまり十字架を己の身に負うことに帰結し、このことが神から「榮光」を、「永遠の生命」を付与される必須の条件なのである。位置的のみか意味的にも、ヨハネ福音書の中心をなす譬えと言うべきであろう。

これに対応するイエスの言葉を他の福音書に求めるとすれば、マルコ福音書のこれもまたほぼ中心部に置かれた第八章に見出せるであろう。ここでも自らの受難を遠く見据え、弟子たちに次のように迫るイエスが報告される。

「人もし我に從ひ來らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に從へ。
己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲また福音の爲に己が生命をう
しなふ者は、これを救はん」(マルコ福音書八34-35)

この言葉が示すものもまた、イエスに従おうとする人間が取らねばならない厳しい道。「己が生命を救はん」とする人間が迫られる「己をすて、己が十字架を負ふ」という厳しい逆説である。イエスが迫る「一粒の麥」としての死、十字架を負うこと。「永遠の生命」が与えられるための厳しい条件の提示において、ヨハネもマルコも異なることはない。

ヨハネのメッセージ

今度はヨハネが伝える使信全体の流れの中で、この譬えを確認しておこう。

「もろもろの人をてらす眞の光ありて、世にきたれり」(一9)

「ロゴス讃歌」と呼ばれる序文(一1-18)から始まり、ヨハネ福音書が一貫して提示するイエスとは、「亡び」を運命づけられた人間に「神の愛」と「救ひ」を、すなわち「永遠の生命」をもたらしべく地上に遣わされた「神の子」「眞の光」としてのイエスである。

「それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして
永遠の生命を得んためなり。神その子を世に遣したまへるは、世を審かん爲にあ
らず、彼によりて世の救はれん爲なり」(三16-17)

神の「愛」、そしてイエスを介した「永遠の生命」の付与による人間の「救ひ」。この救済史観の線上に、地上における「神の子」イエスの業を一貫して描くのが福音書記者ヨハネである。ヨハネはイエス最後のエルサレム入場直前、郊外のベタニア村でマルタとマリア姉妹の兄弟ラザロ、墓の中にあること既に四日、死臭を放つラザロを甦らせるにあたり、イエスがマルタに向かい次のように問い迫ったと伝える。

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか」（十一25-26）

神からイエスへ、そしてイエスからラザロへ。ここでもヨハネが伝えるのは、神の「愛」が与える死を超えた「永遠の生命」である。

さて死せるラザロを「永遠の生命」の内に呼び戻した直後、エルサレムへの最後の入場を果たしたイエスが、いよいよゴルゴタ丘上での自らの十字架を向こうにして語るのが、我々の第十二章「一粒の麥」の死の譬えである。この文脈の中でもう一度、この譬えを確認しておこう。

「人の子の榮光を受くべき時きたれり。誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし」（十二 24-25）

神の「愛」と死を超えた「永遠の生命」。ヨハネはこれをイエス自身が迫られる十字架上の死を背後に置いて提示するのであることを、改めて確認しておこう。

その後福音書記者ヨハネが報告するのは、第十三章から第十六章にかけてのいわゆる「最後の晩餐」、そしてその席でなされるイエスの長大な「告別説教」だ。その中から第十五章の次の部分を引用しておこう。これはイエスが世に残す遺訓であり、他の引用部分と共にヨハネ福音書を貫く中心思想と言うべきもの、ヨハネの手紙にもそのまま連なる愛の勧告である。（岩波書店刊行の『新約聖書』（新約聖書翻訳委員会、1996）は、これに「父からの愛に基づく相互愛」というタイトルを付している）

「父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ。なんぢら若し、わが誠命をまもらば、我が愛にをらん。我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。我これらの事を語りたるは、わが喜びの汝らに在り、かつ汝らの喜びの満たされん爲なり。わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互いに相愛せよ。人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし。汝等もし我が命ずる事をおこなはば、我が友なり」（十五9-14）

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし」。神の愛、イエスの愛、そして人間相互の愛。愛の貫徹のために人間が必要とされる絶対的条件とは「己の生命を棄つる」こと。ここでもヨハネが提示するのは、イエスに倣っての「一粒の麥」としての死に他ならない。

そしてゴルゴタの十字架上での死と埋葬。空の墓の報告に続く、マグダラのマリアへの顕

現と弟子たちへの顕現（十八章-二十章）。これら全ての報告を終えた後、ヨハネは最後にこう記す。

「此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子たることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲なり」（二十31）

かくしてヨハネが伝えようとするイエスとは、何よりもまず神の「愛」を証すべくゴルゴタ丘上の十字架磔殺に至るまで地上の生を歩み抜いた「神の子」であり、その「一粒の麥」としての死によって神から死を超えた「永遠の生命」を与えられ、今やこの世に新たに「栄光」の「神の子」として君臨し、人々に「永遠の生命」を付与しつつある救世主イエスである。イエスの死から既に半世紀以上、ヨハネにはイエスの存在が、神の「愛」をこの地上で死に至るまで貫いて証した「神の獨子」として捉えられ、同時にその「獨子」イエスを人間の救済のために地上に遣わし、「一粒の麥」としての死に渡した神の経綸の全体像もまた、絶対的な栄光感と明晰な遠近感との下に捉えられていたと考えられる。

愛、十字架、永遠の生命

神の愛、イエスの愛、そして人間相互の愛。神来の愛の貫徹の絶対的条件としての「一粒の麥」の死。ここに「愛の福音書」とも呼ばれるヨハネ福音書が持つ厳しい側面が浮かび上がってくる。「亡び」を運命づけられた人間が「救ひ」を与えられるためには、言い換えれば人間が神の「愛」を受け止め「永遠の生命」を付与されるためには、イエスに倣い「一粒の麥」としての死を身に引き受けることが求められているのだ。マルコ福音書において、イエスが弟子たちに対し「己をすて、己が十字架を負ひて我に従ふ」ことを迫ったのと同じく、ヨハネのイエスもまた弟子たちに対し、自らの地上の生命を「一粒の麥」として棄てる覚悟を迫っているのである。これら福音書記者がイエスを介して伝えるのは、「永遠の生命」を向こうに置いた、この上なく厳しい死への覚悟と勧告であることが改めて確認されよう。

2. 時間と関係の多層性

過去・現在・未来、「時間の多層性」

さて「一粒の麥」の死の譬えが持つ拮抗りと奥行きを更に浮き彫りにするために、またヨハネ福音書が持つ複雑さと豊かさにアプローチするためにも、ここに含まれる時間と関係の多層性・重層性にも注意を向けておく必要があるだろう。

まず時間の多層性である。

注意すべきことに、ゴルゴタの丘を向こうに、弟子たちに対して「一粒の麥」の死の譬えを語るイエスとは、「神の獨子」として天上の神から遣わされ、この地上にマリアを母として現在時を生きるイエスである。同時にこのイエスは、これからエルサレムにおいて「一粒の

「一粒の麥」としての死を自らの身に引き受け、死と復活の後再び天の神の許に上げられようとするイエスであり、未来に向かうイエスでもある。だが更にヨハネが伝えるイエスとは、既に「一粒の麥」としての死を果たしたイエス、そして神から「永遠の生命」を付与されたイエスでもある。未来と過去を含んで今に現臨するイエス。「一粒の麥」としての死を挟んで、天と地と天、過去と現在と未来とが幾重にも交錯し切り結ぶイエス像がここには提示されているのだ。それらを表わす表現は枚挙に暇がない。以下に三つほど見てみよう。

「ヨハネ^{かれ}彼 [イエス] につきて^{あかし} 證をなし、呼^{よば}はりて^い言ふ
『わが^{のち}後にきたる^{もの}者は我^{われ}に勝^{まさ}れり、我^{われ}より前^{まへ}にありし故^{ゆえ}なり』」 (一15)

「誠^{まこと}にまことに^{なんぢ}汝らに告^つぐ、
死^しにし人^{ひと}、神^{かみ}の子^この聲^{こゑ}をきく時^{とき}きたらん、今^{いま}すでに^{きた}來れり」 (五25)

「我^{われ}は復^{よみがへり}活なり、生^{いのち}命なり、我^{われ}を信^{しん}ずる者^{もの}は死^しぬとも生^いきん」 (十一25)

過去・現在・未来を貫いた存在、「全時的今」を生きる靈的イエス・キリスト（大貫隆、『イエスという経験』他）。更には天と地、聖と俗、メタフィジカルな世界とフィジカルな世界とを貫いて遍在する救世主^{キリスト}イエス。ヨハネが描くイエス・キリスト像とは多層的な時間と次元を貫き、「永遠の生命」の内に絶対的に君臨する「神の子」なのだ。ここにイエスの死から半世紀以上の時が過ぎ、イエスを介した神の人間救済の経綸を明晰に捉えるに至ったヨハネが描く福音書の底知れぬ奥行きと豊かさがあり、彼が提示する「神の子」イエス・キリスト像のユニークさがあると言えよう。だが同時に、ヨハネ福音書が我々現代人にとってあたかも禅問答のように響き、この上なく理解し難い書物として立ち塞がる大きな原因もまたここにあると言うべきであろう。

福音書記者ヨハネが描くこの「神の子」イエス・キリスト像とは、R.オットーが『聖なるもの』で言う^{デヴィナツイオン}Devination（「靈覚」；小出次雄、「預覚」；山谷省吾、「予覚」久松英二；「直感」；華園聰磨）、いわゆる靈的感受性と認識力を鈍麻させてしまった我々現代人にとっては、遠い異国の夢物語の主人公のように響く存在であり、そのリアリティを捉えようとしてもたゞ恣意的な枠で徒に切り刻む他ない。まして神の圧倒的な君臨感の下に「神の子」像を提示するヨハネ福音書から、近代的理性の枠に収まる合理的・歴史的イエス像を構成しようとしても、その困難さは限りがないと言うべきであろう。

神・イエス・弟子・読者、「関係の多層性」

ヨハネが提示する「一粒の麥」の死の譬えにアプローチするにあたって、またヨハネその人に君臨する神とイエス・キリストのリアリティを理解し、その福音書が宿す豊かさと複雑さを受容するためにも、我々はヨハネ福音書を貫く「時間の多層性」に加えて、この譬えが宿す「関係の多層性」にも焦点を合わせるよう努める必要があるだろう。

「一粒の麥」の死を巡る「関係の多層性」。まず読み取るべきは、神とイエスとの関係において捉えられた「一粒の麥」としての死であろう。先にも見たように、ヨハネによればイエスは、神から迫られた死、「一粒の麥」としての死を引き受けて初めて「榮光」を、「永遠の生命」を与えられるであろう。だがこれも先に確認したように、こう記すヨハネとはイエスが既にこの死を引き受け、神から「永遠の生命」を付与され、現在時を生きる救世主であると確信するヨハネでもある。後に見るパウロと同じく、ヨハネを貫くのは神とイエスとの二重の絶対的君臨感であり、この「一粒の麥」の死の譬えの提示においても、彼が見据える十字架とは、まずはイエスが神から迫られた十字架だと考えるべきであろう。既にイエスを介した神の人間救済の経綸全体に目が開かれ、神を愛として捉えるヨハネ、イエスをその神から遣わされた「神の子」として捉えるヨハネが立つ土台、「一粒の麥」の死の譬えの土台としての、この第一の層を忘れてはならない。

同時にヨハネが提示するのは、ゴルゴタの丘を向こうに、イエスが弟子たちに迫る「一粒の麥」としての死だ。「最後の晩餐」の場での「告別説教」においてヨハネは、弟子たちが「互に相愛」し合い「永遠の生命」を付与されるためには、まずは「その友のために己の生命を棄つる」ことが必要不可欠だとし、これを師イエスの「命令」であり「誠命」だとして提示していた。十字架を挟んでの神とイエスとの厳しい関係が、イエスとその弟子たちとの関係にもそのまま重ねられる。ヨハネが目を据えるイエスが生きた地上の現実。第二の層である。

更に目を向けるべきは、福音書記者ヨハネ自身とその読者、あるいはヨハネとヨハネが属する教会メンバーとの関係である。つまりヨハネは彼自身の内なる神とイエス・キリストの霊的君臨感の下に、自らが現在生きる厳しい現実、彼自身の「生活の座」を見据えて福音書を記しているのだ。彼の読者たちもまた「永遠の生命」を付与されるべく、「一粒の麥」としての死を迫られているのである。

神の愛と、イエスの愛と、そして人間相互の愛。それに対応する形でのイエスが神から迫られる死と、弟子たちがイエスから迫られる死と、そして読者がヨハネから迫られる死。「一粒の麥」の死の譬えとは、ただ単に甘美な愛と死の称揚でも、抽象的な「榮光」や「永遠の生命」付与の約束でもない。ここには愛が貫徹され、「永遠の生命」が与えられる絶対的な条件としての「一粒の麥」としての死が提示され、生と死の厳しい緊張が三つの関係性を垂直に貫いて存在するのだ。ヨハネ福音書が提示するイエス・キリスト像理解の困難さとは、ヨハネの内なる神とイエス・キリストの君臨の下に提示されるこれら厳しい関係の多層性が、先に見た時間的多層性とも密接かつ複雑に交錯することから生まれる困難さである。だがそれは困難さであり厳しさであると共に、ヨハネ福音書が持つ奥深さと豊かさでもあり、これら何重にも積み重なる多層性を丁寧に解きほぐすことの中から初めて、原始キリスト教生成のプロセスとダイナミズムが浮かび上がり、ヨハネが伝えようとする神とイエス・キリストの活きたリアリティも浮かび上がってくると考えるべきであろう。

第四の層、師と弟子たちとの断裂

「一粒の麥」の死。この譬えが持つ関係の多層性。我々はこれらに加えて、更に第二の層の背後に大きく後退してしまった第四の層、イエスと弟子たちとの間に生じた底知れぬ悲劇的断裂にも目を向けることを忘れてはならない。繰り返し確認してきたように、既にイエスを通して成就した神の人間救済の経緯を確信するヨハネは、その福音書の構成に当たり、闇の中に輝く光としてのイエス・キリスト像を専ら前面に打ち出そうとし、この光を脅かす闇については光の背景に大きく後退させてしまったと言わざるを得ない。だがこの悲劇的かつ絶望的な層が見失われる時、原始キリスト教生成の根本的ダイナミズムへの視点が失われ、この譬えをドストエフスキイが自らの遺作の冒頭に用いた意味も、またこの譬えが我々現代人にとって持つ意味も大きく見失われかねないであろう。

ニュアンスの差こそあれ、ヨハネを始め全ての福音書が一致して伝えるのは、イエスに従った弟子たち全員が、いざとなると師を裏切って逃げ去ってしまったという事実である。師イエスが神から迫られ、そして弟子たちに迫った「一粒の麥」としての死、つまり十字架を負うことを弟子たちは自らの身に引き受けなかったのだ。この関係性の悲劇的断裂を超えて、彼らは如何に「一粒の麥」としての死、十字架を自らの身に担い直し、本来の関係性に立ち還ったのか。この譬えの裏に潜むもう一つの層、弟子たちの裏切りとその後の運命に、我々は目を向けねばならない。

ドストエフスキイが見据えたもの

イエスとその弟子たちとの関係の絶望的な悲劇的断絶。イエスに対する弟子たちの裏切りについて記すどの福音書も、彼らのその後について正面からの報告をしているようには見られない。イエスの復活顕現と昇天を巡る輝かしい使信とは対照的に、弟子たちが師への裏切りの後に辿ったであろう悲痛な道行きドラマの詳細は、福音書を始めとする新約聖書においては、その殆んどが闇の中に葬り去られてしまったように見える、あるいは少なくとも我々にはその道程をストレートに読み取ることは至難の業のように思われる。

ここで瞬時、ヨハネ福音書において我々がぶつかった問題を、ドストエフスキイ文学の世界に重ねて見ておこう。ドストエフスキイ文学を貫く中核的な問題の一つとは、イエス像の追求と表裏一体の形でなされた、正にこの「一粒の麥」の死を巡る関係性の断絶という第四の層についての正面からの追求と言い得るものであり、ドストエフスキイが刻む主人公たちのドラマとは、弟子たちのイエス裏切りとその後のドラマと重ねて読まれる時に初めて、その持つ意味の本来の拮がりキワガタと奥行きとを開示すると言っても過言ではないだろう。後に見るように、神を否定し、続いてイエスと「キリストの愛」をも否定し去ったイワンの思索と行動の一切もまた、この福音書におけるユダ的裏切り劇の磁場の内に収められて初めて、その意味を全面的に開示するよう思われる。イワンばかりでない。フォードルやスメルジャコフにおいても、そしてドミートリイやアリョーシャにおいてさえも、作者ドストエフスキイは彼らの「神と不死」探求の旅を、この福音書的磁場において、つまりユダの人間論という

舞台上で専ら展開させたと言えるであろう。ドストエフスキイ文学が我々に開いてみせる最大の問題とは、我々の心が根源的に宿す悪魔の否定の精神の問題であり、突き詰めれば「聖なるもの」を前にして人間の内から現れ出る「肯定と否定」の心、光と闇の分裂、極性の問題であると言えよう。

だが我々はドストエフスキイ世界に進む前に、以下にその不可欠の基礎作業として、ドストエフスキイが思索と創作の根を置く聖書世界になおしばらく留まり、ユダやペテロたちによるイエスへの裏切りとその罪意識の帰趨について、諸福音書や使徒行伝やパウロの書簡を始めとする幾つかの書簡の中から典型的と思われる報告を確認しておくことにしよう。

(以下、次回)